

読み解くと、何が見える？

植物名は漢字で味わおう

どこに生えるの？ その名の由来は？

漢字名には、そんな植物の「いわ謂れ」がたくさん詰まっている！

長年造園に携わり、江戸園芸にも精通している青木宏一郎さんに、草木の漢字表記を読み解く楽しさ、面白さについて尋ねた。

ランドスケープガーデナー

青木宏一郎

●あおき・こういちろう 1945年新潟県生まれ。和のガーデニング学会会長。園遊舎主人。青森県弘前市弘前公園計画設計、鳥根県津和野町森嶋外記念館修景設計などを担う。『解説 花壇綱目』（創森社）、『江戸の園芸』（筑摩書房）など、著作多数。

正確を期するために

——植物名の漢字表記の面白さについて考えてみたいと思っっているのですが、街路樹や公園にある植物ではカタカナ表記のみというパターンが圧倒的に多いようです。

そういう傾向はたしかにあると思いますが、生花や茶花の本では、基

本的には漢字で表記していますね。

「茶会記」というものの存在をご存じですか？ お茶会があった日時や

場所、参加者名、道具立て、会席膳の献立などを記したものです。その記述様式は、信長や秀吉の時代よりもさらに前から続く習わしで、現在でもお茶会を催した際には、必ずといっていいほど茶会の記録をつけま

れた花も書かれていて、花の名前はカタカナやひらがなで書く場合もありますが基本です。ただ、その植物名は、私たちが普段使っている表記とは若干違っていることもあります。たとえばツバキやスイセンは、それぞれ「薄色」「金盞銀臺」と書くこともあります。

街路樹や公園内の植物名、あるい

は植物図鑑などでの表記が主にひらがなカタカナになっているのは、おそらく正確を期するためだと思います。

漢字だと、一つの植物にいくつもの書き方があるんですね。先ほど挙げたツバキは、万葉以前は「海石榴」「山茶」などの字があてられています。江戸時代になって「椿」という字が登場します。江戸時代の書物では海石榴と椿が並列して、明治時代以降になると「椿」が主流になります。ちなみに、木偏に春は、中国ではチャンチンを指し、日本ではツバキとはまた別の植物になります。

また、ある漢字が、別々の植物名として使われている場合もあります。「吉祥草」には、キチジソウとキチジョウソウの両方があり、キチジソウはツゲ科の常緑低木、キチジョウ

ソウはユリ科の多年草のこと。なので、漢字だけだと、どちらを指すのかわかりません。ほかにも、「報春花」「迎春花」などがあります。

こうしたもろもろの混乱を避けるために、カタカナで表記し、一つの植物に一つの名前をあてることにしたのではないのでしょうか。

とはいえ、私が大学時代に造園学科で学んだときは、まだ植物名を漢字で教える教授がいました。庭づくりに植木職人とのやり取りが必須です。昔の職人さんは、漢字名を使っていたので、先生も漢字名を重視していたのだと思います。

NHKの「日本百名山」ではよく高山植物が紹介されるんですが、カタカナ中心だったのが、最近はおツコに入って漢字が出るときもある。高山植物の名前は音だけでなく、漢字もセットのほうが覚えやすい気が

します。

それはあると思いますね。春に咲く花でクマガイソウという植物がありますが、同じような花にアツモリソウという植物がある。これは漢字で書くと「熊谷草」「敦盛草」で、『平家物語』の平敦盛と熊谷直実のことだなとピンとくる人も多いはず。どちらも花が膨らんでいて、昔の武士が矢を防ぐために背負った母衣ほろに見立ててこの名がついたといわれます。

——ゴヨウツツジなんかも、「五葉躑躅」と書かれているのを見れば、五枚の葉が特徴的なツツジなのかなと、なんとなく想像できます。

植物名を正確に伝えるためにはカタカナ表記が合理的で良いのですが、植物の名前の面白さを「味わおう」と思ったら、漢字のほうをはるかにいいでしょうね。